



ハーレム デスティニー

Harem Destiny

小説 竹内けん 挿絵 龍牙翔

立ち読み版



登場人物紹介

Characters

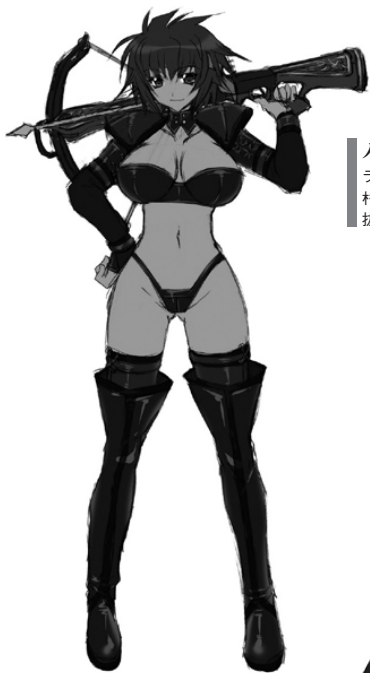


シャロン

ライラックの家に食客としてやってきた放浪人。もともとはどこかの国でそれなりの武人だったのではないかと思われるが、経歴は語りたがらない。

ライラック

インフェルミナ王国の辺境にあるノエル村で、若くして村長役をしている青年。よく旅人などをタダで自分の屋敷に泊めている。



パメラ

ライラックとは幼馴染みの活発な娘。
村一番の獵師の家系で、彼女も飛び
抜けたボウガンの腕を持っている。



ブリギッタ子爵レイリア

名門貴族の出で、野心家な女將軍。勝つ
ためには味方をも傷つける冷酷さを備えて
いる。その容姿は勇ましくも美しい。

第一章

有徳の人

007

第二章

血の誓い

048

第三章

一将功成りて万骨枯る

083

第四章

引き抜き

121

第五章

王都の攻防

161

第六章

新領主

209

第三章 一将功成りて万骨枯る

一瞬、躊躇したライラックだが、やがて決然と頷いた。

「ぼくも、パメラから元気が欲しいって思っていたところだ」

ライラックは、パメラの蒼穹の如き瞳をじっと見つめて、そのままゆっくりと顔を近づけていった。瞳を閉じたパメラはそれを素直に受ける。

「んっ」

ぷるんつとした肉感的な感触が、唇に触れる。

パメラは両腕を、ライラックの首つ玉にしっかりと回す。おかげで男女の胸がびつたりと合わさって、ライラックの胸板に肉感的な乳房が押しつけられる。

「ん、んむ……ふむ……」

二人は夢中になつて唇を重ねた。

唇を擦りあわせるだけでは飽き足らず、口を開いて互いの舌を絡ませる。

「ふう、はう……あん……」

慣れぬ戦場にいる若い男女。疲れた肉体と精神を癒やすには、どうしても異性とのふれあいが必要だったのかもしれない。

（パメラとキスするときはいつもシャロンも一緒だったからな。三人でキスするのも気持ちよかったけど、二人つきりというのも思いがダイレクトに伝わるようで気持ちいいな）
いつもの人目を忍んでの三人との情交とは違う。誰はばかることもない長い接吻を心行くまで堪能してから口を離す。

「ふはあ……」

接吻が終わっても互いの顔が至近距離にある。ライラックはささっと左右を確認する。

そこは個室である。いつものように他人の目を気にする必要はない。そう悟った瞬間、若い牡の欲望は轟炎のように身を焼いた。

「あ、あのさパメラ……」

「な、なに？」

いくらガサツな女といえど、男の欲求を察することはできたのだろう。顔を真っ赤にしたパメラはどもりながら応じる。

そこでライラックは、一度生唾を飲んでから口を開いた。

「エッチ……したい」

「あはっ、ライのエッチ♪」

ぷっと吹き出すようにパメラは笑った。

「いいよ、あたしがライのこと好きなのは知っているでしょ」

「そ、そりゃ……まあ」

こんなところにまで付いてきた女だ。その心をまったく気付いていないというのは失礼であろう。

「あたしだったらいつでもいいよ。ライがやりたいときにやって」

「ありがとう」

パメラの好意に甘えたライラックは、その左耳に接吻し、頬に流れ、首筋に激しくネツキングした。

夢中になったライラックは、黒革のビスチェの上から双乳を鷺掴みに、揉みほぐす。

「ああ……♪」

立ったまま男に激しく求められたパメラは気持ちよさそうな吐息を上げた。

女には男に求められる歓びがあるのだろう。

（見た目通り、凄い弾力だな。生で揉んだらもつと凄いんだよな）

薄皮越しに揉みしただくだけでは我慢できなくなつたライラックは、黒革のビスチェの胸元を引きずり下ろした。

ぽよんっと双乳があらわとなる。

「っ!？」

大きい。服の上からでも予想はついていたことだが、生で見るとやはり迫力が違う。

肩幅もあつてがっちりした体型。太い鎖骨の下から突き出た巨大な肉塊。

獵に出たときなど、湖や河原で素っ裸になって水浴びをしているせいか、乳房までうつすらと飴色に日焼けした肌がなんとも艶めかしい。

健康的な下迫力おっぱいの頂には、桃色のぽっちりとした大きな乳輪があり、乳首がツンと飛び出ていた。

「おおっ」

思わず感嘆の声を漏らしたライラックを、パメラは睨む。

「そんなにじろじろ見るな。恥ずかしい」

男のぶしつけな視線に耐えかねたようにパメラは、怒って両腕で胸元を隠そうとする。

「あ、隠さないで、もっとよく見せてよ」

反射的にパメラの両手首を掴んだライラックに懇願されたパメラは、諦めたように腕の力突き、胸を差し出した。

「もう、しょうがないなあ。なんで男っておっぱい好きかな」

なんだかんだ言って自慢の乳房なのだろう。パメラは男によく見えるように両腕を頭上に翳して、胸を反らす。

大柄な体躯に相応しい、巨大な乳房を差し出されてライラックは圧倒される。

「さ、触っていいかな」

「別にライなら、イヤとは言わないわよ」

「それじゃ」

ライラックは恐る恐る両手を伸ばすと、生乳を握りしめる。

むちつとした肉感のある握り心地だ。

健康そのものの身体。照り焼きにした美味しい肉汁がジュウジュウと溢れ出す健康的な

野鳥のようだ。

「凄いな、パメラのおっぱい。凄い美味しそうだ。もう我慢できない」

女の前で膝立ちになったライラックは、両手に持った媚肉に夢中になってしゃぶりつく。「ああ……気持ちいい、ライにおっぱい吸ってもらうと凄い気持ちいい。え、遠慮しないでいいよ。そのおっぱい、昔からライにあげるつもりだったんだし……ああ、好きなだけ、ああ、ライの好きなように楽しんで♪」

パメラの甘い声に煽られて、ライラックは両の乳首を交互に口に含み、甘噛みし、チュウチュウと吸る。

口内で大振りの乳首が、さらに大きくなっていくのがわかった。

（ああ、癒やされる）

男の欲望をすべて受けとめてくれるパメラは、まるで聖母様のようだ。

慣れない旅、慣れない戦、慣れない人間関係。いろいろと気疲れすることばかりある中で、パメラの存在はライラックにとってオアシスのようだ。

「はあ、はあ……はあ……、あたしのおっぱい、ライの唾液でベトベト……あはっ、凄いとんがってる、は、恥ずかしい……」

勃起したエロ乳首を執拗に舐めしゃぶられた元氣娘は、熱い呼吸を繰り返している。（やっぱ、パメラでも感じているときの表情というのは色っぽいな）

クンニは何度もさせてもらったのだが、暗闇の中でその艶顔を見ることはできなかった。その初めて見る幼馴染みの牝の顔に、男心は否応なく高まる。

「アン、もう、ライったら赤ちゃんみたい。そんなチューチュー吸って♪」

自分の乳房にむしゃぶりついてくる男を見下ろしながら、パメラは呆れたような声を出すが、その表情は嬉しそうだ。

バカにされながらも思う存分に幼馴染みの乳房の食べ心地を堪能したライラックは顔を上げる。

「赤ちゃんにはこんなエッチな身体はあげられないな」

ライラックが指し示した両の乳首は、男の唾液に濡れ輝き、ニョキッと勃起してしまっている。

その赤ん坊の親指ほども勃起してしまっている乳首をライラックは抓つまむと、きゅつと手前へと引いた。

「あん、引つ張つちやダメㇾ 伸びちやうう」

本人が自己申告したように、乳頭がさらに伸びた。

その光景に、目を血走らせたライラックは舌舐めずりしながら生唾を飲む。

「パメラの身体ってエロいな」

「もう、昔っからあたしのこと色気ないとか言つてバカにしてなかったっけ？」

照れ隠しに頬を膨らませて不満を言うパメラに、ライラックは笑いながら応じる。

「ああ、色気はないぞ。純粹にエロい。パメラの身体はエロエロだ」

「キヤッ、それってなんかヤダㇾ でも、ライが喜んでくれるなら嬉しい」

「ああ、エロエロな身体、大好きだぞ」

両手で乳房を思う存分に弄んだライラックは、頬ずりしながら引き締まった腹部を通り、さらに黒革のハイレグショーツに包まれた股間に達した。

黒いショーツ越しに、ぽこつと恥丘が膨れている。

そこに顔を埋めたライラックは、女神様に懇願した。

「ショーツ、脱がしていいか？」

「うん……いいよ」

パメラは恥ずかしげであつたが素直に頷いた。そこで早速、黒革のショーツの腰紐に手をかける。

そして少し引き下げる。

ヌラツと透明な粘液が糸を引いた。潮の匂いがふわつと男の鼻腔をくすぐる。

まるで卵でも隠しているのかと思えるほどに、ぽっこりと土手高の恥丘に、頭髮と同じ、赤銅色の恥毛が萌えていた。

「うわ、中グッチョグチョだな。まるでお漏らししているみたいだ」

「だ、だって……」

いつもの宵闇の中とは違う。陽光の入る室内である。すべてを見られてしまった男勝りの娘は、顔を真っ赤にして羞恥に悶えている。

「かわいいよ。エロエロのおっぱいも、グッチョグチョのおま○こもみんな大好きだ」

その大柄な体軀は、エロかわいいという表現がぴったりだ。

いますぐにでもヌレヌレの陰唇にしゃぶりつきたいというのを我慢して、さらにショーツを下ろす。

黒革のロングブーツに包まれた逞しい太腿を通して、ふつくらした脹脛ふくらばき、そして細い足首へと抜ける。それは凹凸に富んだ羚羊かもしかのように力強く、これぞ女の足といった迫力があつた。

ショーツを完全に脱がせた後、ライラックはパメラの右足をベッドに乗せて、ガニ股開きにさせた。

その股間部分にライラックはしゃがみ込むと、両手を伸ばし、濡れた恥毛を掻き分ける。そして、肉裂の左右に親指を当てて、メラリと左右に剥いた。

「ああ……恥ずかしい」

女の最深部を覗き込まれたパメラは羞恥の悲鳴を上げるが、逃げようとはしなかった。ポタポタポタと愛液の滴が男の顔にかかる。

「パメラのオマ○コって綺麗なピンク色だな。まるでばたん肉みたいだな。鍋に入れて食っちゃいたい」

「もう、好きに食べていいわよ」

「いや、これはやっぱり、生で頂くべきだろう。パメラのオマ○コは生が一番美味しいんだ」

見るのは初めてだが、何度も味見させてもらった陰唇である。その味に誘われて、ライ

ラックは夢中になって生肉に吸いついた。

「ああ、ダメ、そんなに吸ったら、ああ……」

ジュルジュルジュル……。

パメラの悲鳴などにお構いなく、ライラックは夢中になって牝の体液を味わう。

「ふうあ……ライったら、いつもより吸いすぎ……」

幼馴染みの貪るようなクンニに晒されたパメラは、青息吐息といった様子で両腕を伸ばしライラックの頭を掴み、身を硬くする。

しかし、ライラックのほうはそんなことはお構いなしに、活きのいい牝の生肉を舐めしやぶり続けた。

ピチャピチャピチャピチャ……。

「ああ、ああ……ひいん……気持ちいい……気持ちいいよ、ライのベロ気持ちいい。そんな舐められたら、溶けちゃうよ。あたし、おま○こから溶けてなくなりそう……」

口元をだらしなく開いたパメラは、涎まで垂らして喘いでいる。なんとも惚けた表情だ。「パメラ、自分でおっぱいも揉んでみて」

「え、こ、こう？」

ベッドに片足を上げて股を開いた女は、男に股間をしゃぶられながら、自らの巨大な乳房を豪快に揉みしだいた。

まるで乳房を揉むごとに、愛液を絞り出しているのではないか、と思えるほどに豊潤な



液体が噴き出す。

（凄、パメラの身体ってどこまでエロなんだ）

興奮したライラックは、ますます夢中になって女の媚肉を食い散らかす。

「はあ、ダメ、気持ちいい、気持ちよくて、もうダメ、立ってらんない♪ ああっ！」
ビクッ、ビクビクビク……。

健康的な肢体が激しく痙攣した。次の瞬間、四肢からがっくりと力が抜けて倒れ込みそうになったので、慌ててライラックが支えてやる。

そして、そのままベッドに押し倒した。

「いったのか？」

「うん、凄い気持ちよかった……♪」

純朴な少女は恥ずかしそうに顔を押しえながら応じた。

「パメラ、ぼく、もう我慢できないんだけど……入れていいか？」

「うん、あたしも欲しい。ライの女にしてもらいたい」

パメラももう、女として我慢できないらしい。ライラックに操られるがままに、大股開きになった。

そのヌレヌレでヒクヒクしている陰唇を見下ろしながら、ライラックは急いで、ズボンの中から逸物を取り出す。

ピヨンッという擬音を上げるような勢いで飛び出した逸物は、臍に届かんばかりに跳ね

上がっていた。

それをパメラはうつとりと仰ぎ見る。

「はあ、あたしたち繋がるんだね」

「ああ……繋がる」

パメラの逞しい足の両膝の裏に、それぞれ手をかけてがつちりと固定したライラックは、肉棒の切っ先を、慎重に女壺にあてがった。

「あん♪」

パメラが妙にかわいい声を上げた。

亀頭部にトクトクと溢れるマグマの感触が伝わる。

「よし、入れるぞ。パメラ、力を抜いているよ」

「うん」

いくら愛しい男との結合とはいえ、初めてということ緊張しているのだろう。頷くパメラの頬が硬直している。しかし、ライラックのほうもこれ以上の気遣いの方法が知らない。覚悟を決めてぐいっと腰を押し入れた。

「はぐっ!!」

ブツン！

挿入を邪魔する硬い肉門を突破した瞬間、パメラの逞しい体躯の背筋が、反りかえった。しかし、ライラックは委細構わず押し込んだ。

「……」

実妹の行動の意味を計りかねたシャロンは困惑する。

さすがにパイズリを続ける余裕はなかった。だからといって、やめるにも止められないのだろう。ただただ逸物を挟んだまま固まっている。

「あ、あのケイト、なに？」

妹の無言の視線に耐えられずシャロンは、恐る恐る質問する。

それにケイトは答えた。

「姉上は、真面目一辺倒な方だとばかり思っていましたのに、そうか、やることはやってたんですね……」

「うっ、ごめんなさい。わたくし、あなたが思っているような女じゃないわ。好きな男に全身全霊で尽くしたいの」

その答えにケイトは大いに頷く。

「その気持ちはわかります」

妹として、姉の恋人を値踏みしてやろうという気分になったのか、ケイトはライラックの顔をしげしげと見る。

ライラックもまたいたたまれない気分になるが耐えるしかない。

（こういう場合、どう応えるのが正しいんだ）

全身で冷や汗を流して硬直しているライラックを前に、やがてケイトは得心したように

領く。

「なるほど、姉上は面食いだったんですね。地位や名声や腕っ節ではなく、見た目のよい男に惚れるとは」

その感想にシャロンは慌てる。

「ち、違うわよ。わたくしはライラック殿の器の大きさに惚れたのっ!」

動揺する姉を他所にケイトはチラリと、姉の乳房から飛び出す逸物に目を向ける。それから頬を染めて視線を逸らす。

「確かに大きなお大事ですね。アリオーン様より大きい」

「ブッ」

妹の感想に、シャロンは血相を変えて叱る。

「何を言っているのよ、あんたは!? そりゃ、アリオーン様よりご亭主殿のほうが大人なんだし、お大事が大きくて当然でしょ!? あんたしばらく会わないうちにキャラ変わっているわよ!」

そんな姉の前に、ケイトは口元に手をやってクスクスと笑う。

「ごめんなさい」

どうやら、この女勇者様は姉をからかって遊んだらしい。そして、表情を改めてライラックに語りかけてきた。

「ノエル領主ライラック殿。ふつつかな姉ですが、これからも末長くお願いいたします」

「いえ、こちらこそ」

情事の最中に丁寧な挨拶されて、ライラックは恐縮する。そんなやりとりにシャロンは忠告する。

「もう、ケイト、そういうやりとりは別の機会にしないさ」

「だって、わたし、姉上と再会できて本当に嬉しいのです。それにこんな素敵な恋人までお連れになって。武道一筋の姉上は、男なんか鼻にもかけず、將軍として仕事一筋。最後は寂しい晩年を送るんだとばかり思っていました」

ケイトの失礼というか、絶対わざと姉をからかっている言動に、パイズリで両手を塞いでいるシャロンは、ぴくぴくと頬を痙攣させる。そして、思いっきり皮肉っぽい口調で応じた。

「ありがとう。姉妹の積もり話もあるけど、いまは察しなさい」

シャロンとしては、空気を読んでとっとと消えろ、と言いたいのだろうが、ケイトのほうは意図的に無視しているようだ。

「実は姉上、わたしも、アリオーン陛下の寝所に侍ることになりました」

「き、聞いているわ。よ、よかったわね。あなた、昔から、アリオーン様のこと好きだったもんね。念願叶ったじゃない」

そんなこといまはどうでもいい。邪魔だから出てけというシャロンの無言の訴えを無視して、ケイトは続ける。

「はい。アリオーン様もパイズリが好きで、よくわたしのおっぱいに挟みたがります」

「へ、へ」

主君と妹の閨事ねやごとを聞かされても対応に困るのだろう。困惑する姉の耳元に口を近づけたケイトは囁く。

「左右に張ったエラの部分に、尖った乳首を擦りつけるとすつごく気持ちいいですから、ぜひお試しください。こんな感じですよ」

背後から姉の両の乳房を持ったケイトは、その助言通り、乳首を雁の部分に押しつけてきた。

「あ、あん、や、やめなさい。じ、自分で、できるから、あん♪」
実際気持ちいいらしい。シャロンは大いに乱れた。

「それから……」

「ま、まだあるの？」

頼むから早く消えてくれと言いたげなシャロンの耳元で、ケイトは真面目に頷く。

「はい。ここからが肝心ですよ」

こう言われては無下むげにもできない。乳房を内側に折り曲げて、両の乳首を雁の裏側に擦りつけながらも、シャロンは一応、耳を貸す。

そんな姉に、妹は実に悪戯っぽく囁く。

「愛しい殿方にご奉仕している最中に、他の邪魔な女に悪戯されると、死ぬほど煩わしい

のですが、同時にこの世のものとは思えぬほどの快感に襲われます。ぜひお楽しみください」

「ひい♪」

シャロンがなんとも意味不明な悲鳴を上げる。

どうやら、ケイトの右手がシャロンのミニスカートをたくし上げて、お尻を撫でたようだ。

いや、シャロンの動揺ぶりから見て単にお尻を撫でただけではなさそうだ。

「あ、こら、やめなさいっ！　そ、そこを弄つてはダメ、あん、ダメって言っているでしょ、あくつ、わ、わたくしたち姉妹なのよ」

「姉上は、そのままライラック殿にご奉仕をお続けしていればいいのです。わたしが気持ちよくしてあげますから♪」

ねっとり囁いたケイトは、姉の青いショーツを引きずり下ろした。そして、仰向けに寝転がったと思うと、姉の股の間に顔を突っ込んだ。

「へえ、これが姉上のオマ○コですか？　真っ赤な花が咲いたみたいで綺麗です」

「や、やめなさい。ケイト、あなた何をしているのか自覚しているの！」

妹に陰唇を見られたシャロンは、顔と言わず耳と言わず、首回りから胸元まで真っ赤に火照る。

「はい。わたしは妹として、姉孝行をしているのです」

ジュールジュールジュール……。

ケイトはわざと卑猥な音を立てて、実姉の陰唇にしゃぶりついているようだ。

「ああ、吸っちゃだめ、そんなに吸われたらわたくし……」

愛しい男にパイズリしながら、大事な妹にクンニされてしまったシャロンは、眉根を下げてなんとも惚けきった表情になつてしまう。

（シャロンって確か、初めて会ったときも風呂場でパメラに襲われていたよな。そして、ブリギッダ子爵に襲われて、ついには実の妹にまで……。シャロンって女が襲いたくなるようなタイプなのだろうか？）

しかし、ブリギッダに強制レズをされたときはまた違うようで、シャロンは戸惑いながらもそれほど嫌がつてはないようだ。いや、もはや同性に対しても免疫ができてしまったのかもしれない。

開き直ったのか、パイズリを再開し、夢中になつてフェラチオをしてくる。

「うわ、姉上ったら、おちんちんに必死にしゃぶりついちゃってイヤらしいー♪」

いくら妹に揶揄されたからといって、もはや構っている余裕はないらしい。シャロンはただひたすらに乳房を上下させた。

ピンピンに硬くなった乳首が、左右のエラを幾度も擦り、尿道口を濡れた唇で吸われる。その一途な奉仕に、男は否応なく追い詰められた。

「シャロン、もうっ！」

「ど、どうぞ、出してください。わたくしの顔にかけてください」

シャロンの懇願を受けて、ライラックは欲望を爆発させた。

どびゅどびゅどびゅ!!!

銀灰色の前髪から、秀でた額、高い鼻、すっきりとした頬、尖った顎といった艶やかな美貌に白い化粧が施され、胸元へと滴らせる。

同時にシャロンもまた激しくわなないた。

「そ、そこはダメええ……ケイト——ッ!!!」

愛しい男の精液を顔面射精されながら、実妹に悪戯されたシャロンもまた同時に絶頂してしまったようだ。

ぐったりと脱力した姉の股から顔を抜いたケイトは、顔と胸元を男の原液で汚された痴女の艶姿に感嘆する。

「うわ、凄い匂い」

いまにもペロリと舐めてきそうなケイトを、シャロンは諫める。

「ダメです。これは譲れません」

「わかっています。わたしだってアリオーン様の精液以外を欲しいなどと思っていない」
ケイトの見守る前で、シャロンは胸にかかった精液、顔にかかった精液などを丁寧に指で掬ってみんな食べてしまった。

最後に逸物にしゃぶりつき、尿道に残った最後的一滴までチュウチュウと吸い出される。



結果、逸物は何事もなかったかのように、その雄姿を持続させた。

「ああ……まだこんなに……」

自分で萎えることを許さなかった癖に、改めていきり立つ逸物を眺めたシャロンは陶醉の溜息をついた。そして、恐る恐る提案してくる。

「あの、ご亭主殿……もう我慢できません。わたくしを貫いてくださいませ」

シャロンがこう言いだすだろうことはわかっていた。そして、自分もまたやりたくて仕方なかった。しかし、一応確認してみる。

「妹さんの前だけいいの？」

「はい、もうこんなのに構っていませんっ！」

シャロンは開き直ったようである。完全にお邪魔虫扱いされているケイトは、不満そうにぶつぶつと文句を言う。

「こんなのって酷い。姉上のためにやってあげたのに……」

そんな姉妹のやりとりにライラックは苦笑を誘われる。

（この姉妹ってなんだかんだ言って仲がいいよな。ケイト様は久しぶりに会ったお姉ちゃんに甘えたくてしかたがないんだ。英雄といってもかわいいところがある）

パメラが、妹や弟の悪さに苦勞していた姿を思い出す。

しかし、名実ともに国の英雄と称えられている女性の前で、肉交をすることは躊躇いを感じる。

（でもまあ、シャロンが欲しいって言っているんだし、いいか）

覚悟を決めたライラックは、シャロンに命じた。

「それじゃ、四つん這いになってお尻をこっちに向けて」

「はい。これでいいでしょうか？」

シャロンは嬉々として床に四つん這いになり、尻をライラックに向けた。

（久しぶりに見ると、やっぱりいい尻しているな）

行軍中、毎夜、パメラと並べて舐め楽しんだ小尻である。そのきゅつと引き締まった桃尻を両手で持ったライラックは、そのまま左右に割った。

魔法光のもとに、麗しい女剣士の陰唇が開いた。すでにケイトの前戯にイカされた後だけに、とろつとろに蜜が溢れ、内腿まで汚している。

いまさらライラックが再び愛撫してやる必要もないだろう。

「それじゃ、シャロン」

いきり立つ逸物を、シャロンの蜜壺に添える。

その光景をケイトは興味津々に覗き込む。

「姉上、本気でそんな大きいものを頂くつもりですか？」

「うん、欲しい。欲しいのっ♪」

シャロンはもはや恥も外聞もない痴女に墮している。

「こんな大きいに入れたら、姉上の大事なオマ○コが壊れてしまいます」

我慢できないとばかりに、ぐいっとレイリアの股間を顔面に押しつけられた。

ズルズルと豊潤な牝汁を顔面に塗りたくられる。

窒息しそうになりながらも、ライラックは夢中になって食る。

（くう、ブリギッダ子爵のおま○こも美味しいな。危険な女ほど美味しいというか……）
 敢えて食べ物にたとえると、ふぐ刺しのような女だ。そう考えると、愛液のピリピリとした刺激が心を捕らえる。

「ああ、ご亭主殿、そんな先っぽばかり責められては♪」

「うくつ、そんな力ずくで掻き混ぜられたら、ああ♪」

シャロンとレイリアが気持ちよさそうに喘いでいる光景に、一人亀頭部の裏筋を舐めていたパメラがむっとする。

「ずるい。あたしもして♪」

（そう言われても、この状況で、どうしろっていうんだ？ ……いや待てよ）

一計を閃いたライラックは、両足をガニ股に開いて、両足の裏をパメラの極乳の上に置いた。

「あん、おっぱいに足を乗っけるなんて、女に対する侮辱だよ」

「ごめん」

ライラックは慌てて謝罪したが、足の裏を外せなかった。パメラが両手で押さえ込んでいるからだ。

「こうやってしつかり揉んでね♪」

モミモミモミとパメラは足の甲に手を置いて、自らの乳房を揉ませる。

「あん、足でおっぱい揉まれるのって新鮮。手より力強いし♪」

パメラは喜んでくれているが、ライラックのほうも足の裏にコリコリと勃起した乳首の感覚が伝わって新鮮だった。

結果、ライラックは、シャロンに膝枕をしてもらいながら、両手を伸ばし、そのおっぱいを揉みしだき。

同時にレイリアの陰唇を顔面に擦りつけられ、パイズリと尿道口舐めをもらうシックスナイン。

さらには亀頭部の裏筋という男のもっとも敏感なところを、パメラの濡れた舌で左右に転がされながら、両足で巨乳を踏みしめるといふ姿勢になってしまったのだ。

（ああ、極楽すぎる）

ライラックが桃源郷に酔いしれていると、レイリアが押揃ってきた。

「ちんぽがビクビクしているぞ。あまり簡単に出すなよ。領主としての権威にかかわるぞ」

「そ、そんなこと言われても……」

この状態で我慢できる男のほうが変わであらう。

（でも、この極楽をもっともっと味わいたい）

すぐに出してしまうのはもったいない。そう感じたライラックは、必死に下腹部に気合

いを入れて射精を我慢する。

そして、必死にクンニを行い、手足を動かして上下の女を弄んだ。

「ああ、ああん、いい……」

女たちは同性の視線も意識しているのだろう。意外と気持ちよさそうな声を出してくれている。

シャロンに至っては、自らの股間にライラックの後頭部をグリグリと擦りつけているようだ。

（ああ、前からブリギッダ子爵の愛液。後ろからシャロンの愛液。このままじゃ溺死する。もう、我慢できない）

肉体の限界を感じたライラックは雄叫びを上げた。

「もう、イクううううううう!!!」

寧ろから噴き出した熱い液体が、柔らかい肉に包まれた硬い肉棒の中を駆け上がり、そして噴出した。

ブシャッ！

初撃はレイリアの鼻っ柱に浴びせられた。そこからも勢いよく噴き続ける。

どびゅどびゅどびゅどびゅ……。

「ああ、熱い……」

顔面射精をされながら、レイリアは恍惚の吐息をつく。

逞しい肢体もプルプルと痙攣している。どうやら、牡の液体を浴びせられたことで、成熟した女体は果ててしまったようだ。

止め処なく噴出する牡液もやがては止まる。

それと同時にレイリアはゴロリと、ライラックの上から下りた。そして、ライラックと並んで、その左側面から添い寝をする。

そして、自らの胸元にべつとりと浴びせられた粘液を身体に塗りつける。

「はぁ～やはり、女の身体には男の液体がよく馴染むか……あつ、こちら」

ライラックの右側面に回ったシャロンが、ライラックの上を覆うようにして余韻を楽しむレイリアの胸元に顔を埋めて、精液を舐め取っていく。

「お前はいつまでも女好きでいろ。ご亭主殿の精液はわたくしが頂く」

「たっく、この色ボケ女が……まあ、あんたに進んでおっぱい舐めてもらえるのは悪い気分ではないね」

レイリアは諦めたといった様子で、シャロンの好きにさせた。

同時期、パメラは射精が収まった逸物を口に含んで処理してくれている。

自分の精液を貪る女たちを愛しく想いながらも、複雑な気持ちで見下ろすライラックにレイリアが声をかけた。

「どうした？」

「いや、こんな贅沢していいのかな？　っと思つて……」

思わずぼやいたライラックを、レイリアは笑った。

「貴様はもう貴族なのだ。女に奉仕されて当然だという顔をしていればいい」

「いや、そういうわけには……」

なおもぼやこうとするライラックを、レイリアの人差し指が止めた。

「相手に気持ちよくしてもらって嬉しいなら、逆に気持ちよくしてやる。それは男と女、身分にかかわらずぬ礼儀であろう」

直後にパメラが叫んだ。

「あはっ、フッカーツ！」

見るとパメラの目の前で逸物はギンギンに勃起していた。

自分の浅ましさに頭を抱えたライラックだが、覚悟を決めて女肉の布団から上体を起こす。

「まったくみなさん揃いも揃ってスケベですね」

「そのスケベな女を三人侍らせている男はお前だぞ」

レイリアの揶揄に、ライラックは素直に頷いた。

「確かに。今度はぼくの番だね。気持ちよくしてもらったお礼に、思いつき気持ちよくしてあげますよ」

理性を投げ捨てて淫獣となったライラックは、女たちを押し倒した。

「キヤッ♪」

黄色い嬌声を聞きながら、まず手始めにレイリアをうつ伏せにし、尻を高く掲げさせた。
(レイリアさんって、いい尻しているよな)

左右にばんつと張った頑丈そうなお尻である。パメラもデカ尻だが、それよりもさらに大きい。その左右の尻朶を驚掴みにしたライラックは豪快に割る。

お尻の穴をまる晒し。ブライドの高い女にとつてかなり屈辱的な体勢であるはずだ。嗜虐的な気分になったライラックは、肉刀を振りかざす。

「レイリアさん。覚悟してくださいよ。ぼくの女になったからには容赦しませんからね」
「ふふっ……わたしが、そんなちゃんぽごときで屈服する女かどうか試してみるといい」

レイリアの言動はあくまでも強気だが、この声色に隠しきれない期待の色がある。

前回の彼女は、本当に男の味を知らなかったのだらう。好奇心で挿入してみても、その快感に驚愕していた。しかし、今度はもう男根の味を知ってしまった女体である。

いくら強気な女を自己演出していても、肉体が欲してしまっているようだ。

先ほどライラックが散々にしゃぶった陰唇からは、どろどろと愛液が滴り、逞しい太腿の内側を濡らしていた。

ごくりっ。

強気な女をこれから逸物で屈服させるのだ。男としての昂^{たかぶ}りを抑えきれず、ライラックは生唾を飲んだ。

そして、いきり立つ逸物を陰唇に添えると、一気にズボッと押し込んだ。

「あん」

遠慮会釈なく根元まで一気に押し込まれたレイリアは背筋を反らして身悶えた。

ムチムチとした肉壁が男根に絡みついてくる。

「レイリアさん、そんなにチンポが気に入ったんですか？」

「ああ、悪くない……」

真正レズビアンを気取っていたときの名残^{なごり}か、逸物を挿入されたからといって素直に気持ちいいとは言えないようだ。

それと察したライラックは、わざと挑発する。

「へえ、この期に及んで、そんな見栄を張りますか？　なら抜いちゃおうかな？」

ズズズと逸物を引き抜こうとする。

「ちょ、ちょっと待て!!」

逸物があと少しで引き抜けるところで、レイリアは慌てて待ったをかけた。

そこで亀頭部の先っぽがかるうじて残っている状態で止める。

「チンポ、入れられて気持ちいいですか？」

ライラックが改めて質問すると、レイリアは悔しそうに認めた。

「き、気持ちいい……だから、もつと奥まで……いっぱい、ズコズコして……お願い」

あの恐ろしい女が、男根を入れただけでこんなにもかわいくなってしまった。要するに男慣れしていないということなのだろうが、そのギャップにライラックの心は高鳴った。

「ズゴズコして欲しいんですか？」

「あん、お願い早く、ズゴズコしてちょうだい」

「ならズゴズコしてあげましょう」

怖い女がすっかりしおらしくなったことに気をよくしたライラックは、女のくびれた腰を左右から驚掴みにし、景気よく腰を叩き込んでやった。

「あんっ、あんっ、あんっ、あんっ……」

ドスン、ドスン、ドスンと逸物の先端が、女の最深部にぶつかるたびに、牝声は高鳴り、否応なく男を駆り立てた。

さらにレイリアが股の間から結合部を見ていることを察して質問する。

「どうです。自分のオマ○コにおちんちんがずっぽりと突き刺さっている光景を見た感想は？」

「い、イヤらしい。わたしの身体がちんぼの奴隷になっていく」

自分の胎内に男根がズゴズコ出入りしている光景を見て、あのレイリアが啜り泣いている。

「レイリアさん、男と女ってどっちが気持ちいいですか？」

「あんっ、お、男。身体の芯までずんっとくる。ああん、力感がまったく違う♪」

「へえ」

真正レズビアンだった女が、すっかり男の味に目覚めてしまったようである。

（せっかくレイリアさんが男のよさに目覚めたんだし、もっともっと気持ちよくさせてあげたい）

そんな欲求に駆られたライラックは、レイリアの右足の太腿を抱え上げた。

「あああ……」

不安定さからレイリアは悲鳴を上げる。そして、彼女を背後から抱いたライラックはそのまま左側面を下にして、ゴロリと転がった。背面の側位。それでいて、レイリアの右太腿はがばつと開いている。

そして、その右耳を噛むようにして囁く。

「レイリアさんに本当の快樂ってやつを教えてあげますよ」

「え」

ライラックは左右で見学しているパメラとシャロンに目で促した。

「シャロン、パメラ。レイリアさんを極楽に案内してあげて♪」

「はーい」

「了解しました」

以心伝心。多くを語らなくともパメラは、レイリアの upper body に取りつき乳房を揉み、乳首に吸いつき、シャロンはレイリアの下半身に取りつき、陰核にしゃぶりついた。

「ああ、イヤ、どうして、すごい、気持ちいい、ああ、気持ちよすぎる、ああ、ダメ、囁んじゃダメ、そんなところ噛まれたら、イヤ、ああああ……」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価/690円(税込)



全国書店で
好評
発売中

カノジョ
少年に封じられた魔神降臨の刻!
とき
玲音と冬馬・交差する2人の物語、衝撃の最終章へ!

女幹部メル様のセカイ征服計画!

【小説…高岡智空 / 挿絵…鈴眼依縫】

魔海少女
ルルイエ・ルル2

【訳…羽沢回 / 挿絵…ピエール☆よしお】

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

【小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪】



全国書店で
好評
発売中

お腹の子供のパパを
探してます!!
ポテ腹魔法少女が父親探しにむすらすら!!



全国書店で
好評
発売中

クトゥルフの娘たちが
学園祭でメイドさんに変身!?
ルルたちに新たな邪神が這い寄る!

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙酔字態戦姫ノブナガツ! ①～③
- BLANGEL 輪になりて踊る悪者の夜
- 不死の吸血鬼が外Sのご主人様を募集しているようです

- 思春期なアダム ①～③
- 呪曲喰らい団【カースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!

- 借金お嬢小姐 ①～③
- 無敵の姫騎士がPMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

発行/株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨロコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利! 来かねる場合がございましたら、お問い合わせください。場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!